

# 自我のめばえ——再び

津守 真

私の家には大きな雑種の犬がいる。三歳になったS子が、母親が第二子出産のために家族中で私の家に滞在したとき、S子はこの犬をこわがった。それまではS子は私共がおどろく程に大胆に犬に近づき、恐れを示さなかったのである。その間に犬によって危害を加えられた体験をしたわけではないのに、今回は同じ犬をこわくなったのは、この子の中に生じた変化によるのであろう。

もっと小さかった頃、犬をこわくなかったのは、犬も自分も含めた世界全体が、何かに温かく庇護されて感じられていたのだろう。その世界の中では、犬の金色の長い毛は柔か

く、振れるしっぽは面白さを誘った。いまは違う。犬は自分とは違う外の世界に属している。外と感じられる世界は、何であれ自分に立ち向かってくる恐ろしい怪物である。その動きも、吠える声も、真直ぐに見つめる黒い目も、子どもにはこわい。外界が分化しはじめたときに、子どもの内面が生み出す幻想の世界である。

S子の家に赤ん坊が生まれるまでの四週間、この子にはこわいものがある。見なれない道路や公園、話にだけ聞く赤ん坊の存在、いつ母親が入院するのか、いつになったら自分の家に帰れるのか分からない不安など、外界の不安定さと同様に、子どもの内面の世界は不安定で、いつこわれても不思議はない程揺れていた。その揺れ動く内面の世界は、不安定な高い所から落ちる遊びや、繊細なワイングラスを並べる遊びなどにあられた。私共は、この子の存在感が崩れてしまわないように、身体を接して応答し、その心を支えるのに懸命になった。

四週間たって、赤ん坊が生まれ、母親が入院した。その翌日からこの子は高熱を出した。父親は驚いて休暇をとり、数日間、昼も夜もこの子を抱きかかえて過ごした。快くなった頃のある日、この子は小さなプラスチック製の犬の玩具を見つけた。本物の犬はこわくてさわれないが、プラスチックの犬ならば手の中で自由になる。夕方、その玩具の犬を、本物の犬がかじって耳を破ってしまった。子どもは泣いた。私はやっとして犬の耳を

修理して復元したら、この子はそれをトースターに入れて温める遊びをした。手の中の犬は破られたけれども、修理して直すことも可能なことを子どもは知った。

一週間の入院の後、母親と赤ん坊は私共の家に帰って来て、再び日常生活が始まった。子どもは赤ん坊を目で見て触れることができ、母親は毎日傍で寝ることができ存在となった。そして、犬をあまりこわがらなくなった。外界は、あるときには嫌だったり、びっくりさせられたりするものであるが、何でもやたらにこわいものではない、現実的に対応すればよいことが分かってきた。外界に立ち向かう自分も、不安定でこわれそうな存在ではなく、しっかりした自分自身になってきたように思われた。

この頃、毎日のように繰り返した遊びに、自分が意志的に相手を拒否する状況を設定する遊びがあった。たとえば、赤いリボンを腕に結んでくれと私に頼む。そうしてあげるのと、「イイナア」と言っていると。私が「イイナア ホシイナア」と言うと、「イヤー」と言って拒否して笑う。何十度となくそれを繰り返すので私はくたびれてしまう。私や妻を相手に毎日その遊びをした。自分と他者との境界を明瞭にし、自我の領域を確かにしていくプロセスと私は考えた。

母親と赤ん坊が家に帰って後、更に四週間、この子と家族は私の家に滞在して後、ようやく自分の家に帰ることになった。赤ん坊の一月健診に病院に行ったら帰るとかねてか

ら言われていたので、その日が来たときには、この子は自分の家に帰るのが近づいたことを予期していたようだった。何度か私の養護学校に遊びに連れてきたことがあったが、健診日に来たときには、前に遊んだ場所に一通り行ってみて、知った先生を探し、別れの挨拶に来たように思われた。

その翌日には、私が学校に出かける前に、子どもは私と一緒に玄関の外に出ることを要求した。猫にごちそうをあげると言って猫を探す。二か月前に来たばかりの時に、まだ遊びなれない場所を面白くするのに私も懸命で、たまたま通りかかった猫におだんごをあげようと言って泥をこねた。その猫をさがしていた。あの私の家に来た頃の不安定な時を子どもなりに回想して省察しているのではないかと思われた。それから門の外に走り出して近くの公園にゆき、滑り台、ブランコ、鉄棒、砂場と、一回ずつ立ち寄ると、もう帰ると言って自分から帰ってきた。

夜になって私が学校から帰ってきたとき、この子はいつものようにカーテンの中に入りたり出たりする遊びをしようという。いつもだといそがしく出たり入ったりするのだが、この日はカーテンの中に私と一緒に長い時間静まり、それから自分だけカーテンから外に出て、「ジーチャンがいなくなった」と言って笑う遊びである。私も「ジーチャンがおかくなかった」と言って皆で大笑いした。

翌朝、この子の家族が帰る日、朝からこの子はもう両親にくっついて、私共の顔を見よ

うとしなかった。これから自分の家で両親との生活をはじめるとの意志を表明しているように思った。そして私が出かけるときに、また遊びにおいでと言うと、「もうこない」ときっぱりと言って、私の目の前で玄関のドアを閉めた。

前半の四週間と後半の四週間と、母親入院の一週間と、合わせて二か月の間に、子どもは存在の危うさを支えられて、不安定で恐ろしく思われた外界に自分から立ち向かう力を獲得した。外界は、自らの不安定さから発する幻想によって見るものではなく、自分の内に確かにされた力と意志をもって立ち向かい、現実 directly に触れ、対処してゆくものであることを、子どもなりに体験したのであると思う。この後、生活の変化の節目に、子どもの存在が危うくされるときも、この基本的体験が子どもの自信の底辺にはたらいである。今回のことが三歳のはじめに起こったことは私には意味深く思われる。この子の母親が同じ位の年齢のとき、私は、「もつれた糸玉から中心のあるうずまきへ」という、初期の自我体験があることを知ったのであった。

子どもの存在が危ういとき、それを支えようとする保育者は深いところで子どもとかかわる。そこを通り抜けたとき、子どもと保育者との間には親愛感が共通に生まれる。それはまた同時に人間関係の発達の危機でもある。そこにとどまって閉ざされた関係になった

ら、人間的成長は停滞する。子どもも大人も、そこを出発点としてそれぞれの人生に新たに立ち向かう。毎年三月には、とくにこのことを考えさせられる。

(愛育養護学校)

